さあ、幸せになりましょう

夏代悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さあ、幸せになりましょう

【Ｎコード】
Ｎ０５２７ＢＡ

【作者名】
夏代悠

【あらすじ】
王后陛下に仕える侍女、レイディ・フィオレット・ラーエはデュサール伯爵の次女。ただし訳あって引き取られた養子で伯爵家の人々とは血縁関係がない。彼女のために国王陛下が用意した縁談の相手は、密かに憧れていた青年貴族、アルドルーク侯爵ダレン・クラディエス。先代アルドルーク侯爵の庶子で、いわくありの「五人目の息子」だった。

七年前　1

サー・ダレン・リッシャーは、黒鹿毛の愛馬を引いて森の中の小道を歩いていた。

黒鹿毛の背には一人の少女が横座りでおさまっている。その顔色は、まだ幾分か青褪めていた。

口から泡を飛ばし暴走する馬に行き会ったのはつい先程のことだ。その背に為すすべもなくしがみつく少女の姿を見てすぐさま後を追い、疾走する馬の背から少女を助けたはいいが、彼女の馬を捕らえることは叶わず、走り去るのをただ見送るしかなかった。何があったかはわからないが、尋常でない暴れ様だったから、下手をすれば木に激突でもしているかもしれない。

仕方がないので、顔面蒼白になって震えている少女を自分の馬に乗せ、ダレン本人は徒歩で森の出口に向かっているのだ。

未だ衝撃から抜け出せずにいる様子の少女は、見たところ十四、五歳あたりだ。纏う乗馬服は生地も仕立ても上等なもので、一見して貴族階級、それも裕福な家の令嬢とわかる装いだった。

現在二人がいるのは、森とはいっても広大な王宮の一角である。人の手で整えられた森は、時には野生の鹿が放され、それを狩る遊戯の場にもなるが、平素は貴族階級に属する人間が乗馬を楽しむ、いわば散歩道だ。馬に乗ってうろうろしている人間は、ダレンのように気晴らしに馬を走らせる騎士でなければ、貴族とそのお付きに決まっている。

「あの……」

か細い声に、ダレンは振り返り馬上を仰ぎ見た。

「その、助けていただきありがとうございます」

緑色の瞳がダレンを見つめていた。

「礼を言われるほどのことでもありませんよ」

かろうじて無礼にはならない程度の素っ気ない口調で応じる。

「ですが、その、わたくしだけあなたの馬に乗せていただいて――あの、もし何かご用の向きがあってどこかへ行かれる途中でしたら、お邪魔をしてしまったのではないかと」
　言い募る少女を安心させるため、ダレンは微かな笑みを見せた。
「私は閑を持て余して馬を遊ばせていただけです。それに、あなたのような方と一介の騎士が相乗りというわけにはいかないでしょう。他人に見られれば何事かと驚かれますよ」
「そう……、ええ、そうですね」
「ところで、お名前を伺ってもよろしいですか。あなたを送り届ける先を知りたいので。レイディ――？」
「フィオレット。フィオレット・ラーエといいます」
　レイディの称号は貴族と認められた女性に許されるものだ。十中八九は間違いないだろうと思っていたが、案の定、少女は訂正をしなかった。
「ラーエ……たしかデュサール伯の一族でしたか」
「はい。現在のデュサール伯爵、デュラン・ラーエがわたくしの父です。その……わたくしは養子なので、血の繋がりはないのですけど」
　最後の部分を小声で告げ、困ったような顔になったレイディ・フィオレット・ラーエを見て、ダレンは内心で首を傾げた。
　貴族、とりわけ伯爵以上の有爵者が当事者となる養子縁組は厳しく裁定される。徹底的に調べ上げられ国王と貴族院の認可を得て、そうしてようやく縁組が成立するのだ。
　厳しさには当然ながら理由がある。この国の貴族法では、養子縁組が成立すればそれ以降、実子と養子が完全に対等なものとして扱われる。さらに爵位継承においては長子相続ではなく、推定相続人の中から相応しいと思われる者を、これも国王と貴族院が指名することで相続人が決定されるため、実子や近親者ではなく血縁関係のない養子が襲爵することが往々にしてある。というよりも、そのために養子を迎えることが多い。

つまり、有爵者が養子を迎えるというのは、実子の出来が悪く親族にもろくな人材がいないため優秀な人間――多くは家来やその子息――を養子に迎える場合か、子宝に恵まれず親族に適当な人間がいないので後継者となる者を欲する場合だ。

どちらであっても望まれるのは男子、それも才気があると評価されるような人間であることが好まれるため、若くても十代後半、多くは二十代、三十代の者が選ばれることがほとんどだ。爵位継承においては、実子と養子が対等に扱われるのと同様、男子と女子も完全に同等にみなされるが、それ故に戦に不向きな女子は不利という事情がある。

その点で十代半ばの少女が伯爵の養子というのは、非常に珍しい例だ。

デュサール伯爵は余程周囲の人材に恵まれていないのか。伯爵自身が子を望めないほど高齢なのか。

思わず考え込んでしまったダレンである。

ダレンの疑問を正しく読み取ったようにフィオレットが説明した。

「伯爵には、奥方様との間にちゃんと実の娘がいます。わたくしよりひと月先に生まれた、姉です。わたくしが伯爵の養子になったのは、少々事情があってのことなのです」

ダレンは曖昧に相槌を打つにとどめた。

親族の誰か、あるいは伯爵自身の庶子だとか、代々の家来の娘が幼くして孤児になったためだとか、そういうことなのだろうと考えた。どのような背景があろうと、伯爵令嬢には違いない。

「伯爵のご令嬢が供の一人も連れずに外出されるとは……。失礼ですが、お一人での乗馬が趣味なのですか？」

暴れる馬を御せず、ただしがみつくばかりだった姿を思い浮かべながら、少々意地の悪い気分で言ってみる。もっとも、あの場合は振り落とされることなくしがみついていられただけでも上出来だ。

フィオレットは真っ赤になって俯いた。

「供はいます。ただ、馬に乗れない子なので」

それで森の外に置いてきたらしい。
「乗馬は、得意というわけではありませんが、不得意でもないつもりです。ファーナは――ファーナというのがわたくしの馬の名前ですけど、おとなしくてとても利口ないい馬なのです。なのに先程は突然暴れだして、どうにもできず……。あんなことは初めてです」
それはそうだろうとダレンは思った。貴族の令嬢に暴れ馬を用意する筈もない。選びに選んで賢く気性の穏やかな馬を連れてくるだろう。
「何かに驚いたのかもしれません。後で人を出して探すのがいいでしょう」
無事でいるかどうかはわからないが。脚をどうかしていたら、最悪その場で殺すしかない。
「なんにしても、次からは乗馬に長けた供を同行させることをお勧めしますよ」
「そうですね、本当に」
フィオレットは神妙な顔で頷いた。
「実は、乗馬はあまり好きではないのです。ファーナは可愛くて大好きなのですけど、乗るのは久し振りでした」
「それは馬が勿体ない」
つい本音を漏らしてしまった。
「姉にもよく言われます。姉のイアナとファーナは姉妹馬なのですが、姉はイアナよりファーナがお気に入りで、乗らないなら譲れと」
姉は馬が好きで、最近は騎士が乗るような軍馬を欲しがっているのです。フィオレットは笑った。彼女の姉君は随分と活動的な令嬢であるらしい。
笑いをおさめ、フィオレットは一転して憂鬱な顔になった。
「北の女王陛下は遠乗りや狩りがお好きだと聞いて、わたくしもせめて乗馬だけは上達しなければと思ったのですが」
北の隣国を治める王、ユーフェルミナ三世陛下は、戦装束で馬に跨り戦場を駈ける、好戦的な一面を持つ人物として知られている。

その女王陛下は、年内にこの国の国王であるエドマンド五世陛下と婚礼を挙げる。エドマンド陛下は二十六歳、ユーフェルミナ陛下は二十八歳だ。

このところ貴族女性の間では乗馬が流行りだと小耳にしたが、原因はユーフェルミナ陛下だったのかと、今更ながらに思い至った。乗馬巧者の女王陛下の取り巻きを目指すには、乗馬の腕は必須ということなのだろう。

レイディ・フィオレットも貴族女性らしく、高貴な方の関心を得るため慣れない乗馬に励む気になったというわけだ。そう考えたのだが、続くフィオレットの言葉にダレンは耳を疑った。

「――わたくしはユーフェルミナ陛下のお側に仕えることになるのですが、陛下はお閑があれば遠乗りに出られるという話で……」

「――それは侍女として陛下にお仕えするということですか？」

「ええ、そうです」

王の妻に仕える侍女は、主人よりも年上の、夫のある女性が選ばれることがほとんどだ。多くは公爵や侯爵の夫人、または本人が有爵者である。はっきりとそう決められているわけではないが、慣例からするとフィオレットがユーフェルミナ陛下の侍女に取り立てられるというのはまず考えられない。

疑問を抱えながら、ダレンは森の外へと続く道を辿っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0527ba/

さあ、幸せになりましょう

2012年1月1日01時47分発行